

戦前昭和期日本の南洋 ・南方への商業的進出と貿易

丹野 勲

はじめに―昭和期日本の南洋ブーム

日本は、大正から昭和にかけての時期、南洋ブームがあった。日本は、植民地であった台湾、委任統治を行っていた南洋群島、および現在の東南アジア地域、当時は南方、外南洋とよばれていた、いわゆる南洋に対して強い関心と興味を示したのである。さらに、南洋に対する日本の各種進出を促進する思想としての「南洋論」が盛んに主張されてきた。南洋ブームに乗って、日本人の南洋への移民・殖民、投資、企業の設立、開拓事業、貿易、商業進出、資源開発、などが行われるようになった。

第二次大戦以前の昭和十二年十月一日当時の外南洋各地に留日本人の数をみると、三万九千二百四十六人である。国別にみると、フィリピン二万三千九百九十一人、英領マレー七千三十人、蘭領東印度六千四百八十五人で、この外に、英領北ボルネオ九百二十一人、タイ五百二十一人、仏領印度支那

二百四十一人などである⁽¹⁾。フィリピン、英領マレー、蘭領東印度の三国が、日本人の外南洋での活動の中心で、在留者の数、事業、またその地域的な広さからいっても、外南洋の大部分を占めている。外南洋は、豊富な資源と人口の多さで注目されてきた。政治的には、日清戦争後、北守南進論が唱えられ、中国大陸とともに、南洋が取上げられた。

図表一は、昭和十二年十月当時の南方在住日本人について、国ごとに職業をみたものである。これを見ると、南洋での日本人の職業で最も多いのは、農業および商業で、次が水産業および工業である。国ごとにみると、フィリピンでは農業、英領マレーでは商業、蘭領東印度では商業が最も多い。この農業、商業、水産業、工業の四分野を中心として、日本人は南洋に進出したのである。業種別にみると、農業および工業者はフィリピンにおいて最も多く、水産業はフィリピン、および英領マレーに多い。商業はフィリピン、および蘭領印度であるが、英領マレーも相当の数があつた。

フィリピンが農業者数において、他の南洋諸国に比較して多いのは、ダバオにおけるマニラ麻栽培のためである。昭和十二年当時、フィリピン在住日本人二万三千九百九十一人の内、一万五千七百五十五人がダバオ在住である。ダバオでは、主として日本人は、マ

図表一 南方国別日本人職業者数 昭和十二年十月

	比 律 賓	英 領 馬 來	蘭 領 東 印 度	總 數
農 業	六、〇五五	一四八	二七八	六、四八一
鑛 業	一六	二一四	一八	二四八
水 産 業	一、一九四	一、一八七	三〇七	二、六八八
工 業	一、八三四	二六三	二七四	二、三七一
商 業	二、五九四	一、三五八	二、三一二	六、二六七
交 通 業	一二六	一二	三四	一七二
公務及自由業	三〇一	二九三	一九五	七八九
家事使用人	一〇九	二四四	六九	四二二
其 他	一一〇	八一	五九	二五〇
無職(主として家族)	一一、六四九	三、二三〇	二、九三九	一七、八一八
合 計	二二、九九一	七、〇三〇	六、四八五	三七、五〇六

(出所…入江寅次(一九四二)『外南洋邦人の現勢と其の歴史的背景』南洋資料第九八号、南洋経済研究所、十頁)

ニラ麻栽培事業に従事しているが、椰子の栽培に従事している者も多い。昭和十二年までに、ダバオにおいて日本人がマニラ麻事業のために投下した資本は約六千万円で、日系事業会社は約三十社、自営個人約三千人、他はこれら会社、個人、または外人経営耕地において労働に従事する者である。日本人によって生産される麻は、ダバオ全生産量の四分の三、全フィリピンの四分の一に相当した⁽¹¹⁾。

南洋における日本企業のもう一つの柱は、ゴム栽培事業である。昭和十二年までに、南洋において日本人がゴム栽培事業のために投下した投資額は、八千万円から一億円とされている。マレー半島、ボルネオ、スマトラ地方が、ゴム栽培の主たる生産地で、このために日本人が租借している土地面積は、昭和十二年当時、約三十三万町歩（一町歩は約九、九一七平方メートル）、その内植付面積が十三万町歩である。その時期、南洋でゴム栽培に従事する日系会社は二十四社、日本人の個人経営は約七十人、一年間の生産量は、約一万六千トンであった⁽¹²⁾。

ゴム栽培で使用する労働者は、南洋の現地人、および中国人、インド人、現地人などの苦力（タリー）が中心で、日本人はそれほど多くなかった。これに対して、ダバオにおけるマニラ麻栽培事業は、その労働

者は主として日本人が中心であった。ゴム栽培だけでなく、古々椰子、油椰子、コーヒー、茶などの南洋での栽培事業でも、その労働者は必ずしも日本人ではなかった。南洋でのゴムなどの栽培事業では、日本人の移民を伴わなくても、その現場において容易に低廉な労働力を求め得ることが出来た。南洋での栽培事業の特徴が、その現地人などの外国労働力の使用にあった。戦前の日本人の海外進出をみると、北米、ハワイ、およびブラジル、ペルーなどの南米などでは、先ず日本人が移民し、事業に従事した。多くの日本人移民は、裸一貫で海外に出て、農地や工場などに身を投じて働いた。一方、南洋では、ダバオにおけるマニラ麻栽培を除いて、労働力は現地で得られる現地人や外国人を活用したのである。

戦前昭和の時代に南洋において日本人が進出したもう一つの事業に、水産業がある。歴史的にみると、明治二十年代から日露戦事前に至る間、オーストラリアの木曜島付近を中心とする日本人の真珠貝採取への進出があった。南洋では、シンガポール、英領北ボルネオ、ジャワ、セレベス、中部および北部スマトラ、フィリピンのマニラ、ダバオ、その他各地において、日本の漁業者が進出した。

戦前昭和の時代において、小売り、貿易等の商業的

事業も南方進出の中心の一つであった。本稿では、この南洋・南方における日本の商業的進出と貿易について、事例を含めて議論する。

第一章 南洋への商業的事業の進出

第一節 日露戦争後の南方への進出

南方における日本人の発展としては、栽培事業、水産業、鉱業、製造業などの活動とともに、商業部門における進出がある。日本の戦前の南方への商業的事業進出の時期は、日露戦争以後から第一次大戦までの時期、および第一次大戦から第二次大戦までの時期に大別することが出来る。地域的に進出先をみると、シンガポール、マレーシアなどのマレー半島、ジャワを中心とする蘭領印度、マニラ、ダバオを中心とするフィリピンが主要な地域であり、その他の地域は、極めて少ない^(四)。

第二節 行商人の南洋への進出

一九〇五(明治三十八)年の日露戦争終結後、日本人は南方への商業に進出する者が増えていった。その当時、南方の日本人は、行商者も多かった。日本の農

村地帯を売薬千金丹の行商で当時有名であった盛生薬館が南方進出を企て、バタビア(現在のジャカルタ)に拠点を置いていたのは、明治四十三年頃である。盛生薬館の南方進出は不成功に終わった^(五)。しかし、成功した行商もかなりあった。森下仁丹もその頃、南方に進出した。

行商の種類は、雑貨、売薬から、煎餅焼き、吹き矢、玉ころがし等があったが、行商人の多くは売薬を目的とするものであった。マレー半島、ジャワ、スマトラ、ボルネオの方まで行商に行った。売薬行商は、派手で、賑かで儲けが多かったようである。日本人の売薬行商は、特に日露戦争直後などは、南洋の現地の到るところで非常な歓迎を受けたようである。当時日本は、大國ロシアに勝った戦勝国で、薬を売る日本人の行商人は、現地での戦争に従軍した者のように見られ、特に医療の心得さえあると受取る向きも少くなく、事実そういう風に行った者も多かった^(六)。その行商の姿は、胸に従軍徽章や赤十字徽章をぶら下げた軍装のような恰好をし、手風琴を鳴らし、ヒゲを生やしたりして、これらの薬の効能を述べ等しながら、南方の村々を回り歩いた。その薬が、かなりの高値を呼び、相当の利益を取めた人も少なくなかったようである。胸間に赤十字の徽章などをつけていたりしたのである^(七)。

千金丹、清心丹、實丹、頭痛膏、固腸丸などの日本の薬を、現地で日本よりかなり高い値段で売ることが出来た。日本人の薬行商は、現地住民を一人か二人雇い、さらに華人を商売の仲介人あるいは通訳として同伴することもあった。

江川且庵は、『南洋を目的に』という著書で、この行商の姿を以下のように記述している^(八)。

『彼等は山間の僻地に至り、酋長を訪問して、多くこれが斡旋を待つなり。予一日或る寒村を巡遊せし際、数人の日本人が石油の空罐を乱打して、何事をか叫びつつあるを耳にせり。何事ならんと顧みれば、我が同胞の行商人が、酋長を先頭に、売薬の広告をなしつつある光景にして、村民は業を休みてこれら一行に付従せるなりき。その滑稽なる恰も子供の遊戯の如く、抱腹せざるを得ざりき』

『セレベス、メナド郷の一旅館に於て、行商の面白きを語りて、一日予に行商の同行を求めし事ありき、予は彼れの言ふがままに随行して寂しき村落に入り、二、三の民家を訪ふて最終に酋長の家を訪問せしが、折幸く酋長の愛嬢が腹痛のことと

て、酋長の心配甚しく、予等売薬商人を見て拜がまんばかりに喜びぬ。予が同伴者は直ちに仁丹三、四粒を與ふれば愛嬢が腹痛は立処に癒えぬ。これを見し酋長の喜び謂んかたなく、喜々と懷中より五十金を與へ帰路遠ければとて、駿馬をも添へられたり。予等は酋長より贈られたる馬に乗りて、揚々立帰しが、馬は翌日三百金に売却し、結局仁丹三粒は、三百五十金と化しぬ。』

以上のような話は、少し割引いて受取る必要があるが、とにかくこういった種類の話があったようである。

この売薬行商による活躍は数年間続いたが、その後資金を蓄えた者は店舗を構へて小売商となり、更にその商品も、単に薬品のみならず各種の雑貨類を取扱うこととなった^(九)。トコ・ジャパンとして、雑貨店などを始めたのである。

南方のジャワでの日本商人の発展において重要な人物として、堤林数衛と小川利八郎がいる。

堤林数衛は、明治三十一年、初めてジャワに行き、ジャワの実情を見て、日本人による商業的発展の可能性を確信した。堤林数衛は、明治四十年に十六人の日本青年を率いてジャワへ渡り、ジャワで行商を始めた。その後、さらに多数の日本人青年をジャワに迎え、山村

水廊、どんな僻村にも足を運んだ。その基礎が固まるにつれて、ジャワ全土に三十有余の支店を設置する大規模な商業事業に発展し、農園の経営にも進出しするようになった¹⁰⁰。

第三節 南方の行商人—小川利八郎

小川利八郎は、千葉県の松尾藩の士族の家に生まれ、東京美術学校に入学、同校を第一期生として卒業し、画家を目指した¹⁰¹。フランスに留学したいと考え、シンガポール渡航した。日露戦事が始まったため、しばらく形勢を見ていようと考え、シンガポールにとどまった。小川利八郎は、生活の資金を得るために、肖像画を描いたりしていた。ジャワに行くと中国人の金持が非常に多く、シンガポール以上に収入があるという噂を聞いた。それで、一九〇五（明治三十八）年の日露戦争終結頃、ジャワに行く決意をした。ジャワに行つて、中国人の富豪の肖像画を描くと、思った以上の収入があつたが、何か財産が得られるようなその他の何か適当な商売はないかと考え、売葉を思いついた。当時東京の商業会議所の会頭であつた中野武宮に持っている金を全部送つて、商業会議所で適当と思ふ売葉を見計つて送つてもらつた。当時は、交通不便な時であるため、数か月後にその売葉が手許に届いた。小川

利八郎は、その売葉を持つて町から町、村から村へと、山越えをしたりして、相当危険を冒して行商して歩いた。それもただ行商するのではなく、自分は医学も心得ていると言つて、医者のような顔をして診察してやり、その病気にはその薬が適薬だと、自分の売葉を売りつけた。小川利八郎は医学も少し勉強し診察が適中すると、田舎の医者のない村々では、とくに歓迎され、薬は売れるようになった。薬ばかりでなく、その他の雑貨も売ろうと考え、それ迄に売り上げで得た金をまた商業会議所に送つて雑貨を買ってもらい、雑貨の営業を始めた。丁度その当時中部ジャワのスマラン(Semarang)に博覧会が開催されたので、それを機会として小川利八郎氏はスマランの日本人会長となり、その会長の肩書を利用して、日本に帰つて、その博覧会に出品する商品の運動を行つた。その博覧会に日本商品を出品して広告したのが非常に好い結果を出し、益々日本雑貨と売葉が現地で歓迎されるようになった。日本商品の雑貨や売葉が本場に認められたのはスマランの博覧会を契機としてである。この博覧会を巧みに利用したのは当時の小川利八郎と堤林敷衛で、その当時、ジャワにおける日本雑貨の小売店としては小川利八郎か堤林敷衛かと言はれ、両方張りあつて競争的に事業を拡張して行つた。

小川利八郎は、小川洋行としてジャワ全島に八ヶ所の支店を設けるほど事業を拡張していった。その後、大倉桑馬等の出資も得て、大倉、小川共同で経営するという意味から、資本金百五十万円の共同商事株式会社を設立し、事業を継承した。しかし、この会社の経営は思うようにうまくいかず、会社は解散し、また元の小川洋行に逆戻りした。その結果、各地の店は閉め、スマラン、ソロ、マランの三か所の店のみとなった。

このような、この時代における日本人商人のジャワを中心とした南方進出は、日本の南方への商業的事業発展の揺籃であった。また、小川利八郎のジャワでの成功談が日本において当時有名な雑誌である「実業之日本」に掲載され、それに刺激されて南洋のジャワを憧憬して進出した者も多かったという^(二二)。

第四節 第一次大戦後の南方への進出

明治の末期から大正時代にかけて、日本は、マレー半島においてゴム栽培事業を行う企業の進出に伴い、日本人商人の進出をみた。また、フィリピンにおいては、ベンゲット道路工事就労のための進出、ついで、ダバオでのマニラ麻栽培に従事する日本人の移住に伴って、商業的發展をみることとなった。

大正三年、第一次大戦の勃発は、日本人の南洋への

進出を促進することとなり、各方面において、著しい躍進振りを示した。戦争勃発によって、欧州品の南洋市場への供給は途絶え、また欧米人の投資手控え、農園売却等によって、企業、商業両部門にわたって、日本人の新しい發展をみるに至った。欧州品に代る日本商品の販売は、これ取扱う日本の貿易商、小売商の進出となった^(二三)。

第五節 昭和期の南方への商業進出

昭和に入って、日本の商業の南洋進出はさらに加速する。日本人商人は、マレー、ジャワ、フィリピンその他各地において、貿易業者や小売業者として活躍した。フィリピンではバザー (Bazaar) の名称を、また蘭領印度ではトコ (現地語で店舗の意) の名称の日本商店が、日本商品とともに各地に現れた。

日本人の南洋での商業的發展の中で、幾度となく華僑の日貨排斥が行われた。しかし、日本商品の南洋市場における需要は強く、そのポイコットの結果、かえって日本小売商の活躍を増大することになった。

蘭領印度では、昭和十二年当時、商業を営む日本人は約二千三百人 (家族店員を含む) で、その内小売商は千人程度であった^(二四)。英領マレーでは、戦前昭和期、日本人の小売商はほとんどシンガポールに集中し、マ

レー半島には多少散在していた、この時期、英領マレー全体で、日本人経営の小売商は百二十軒程度であった。小売商の取扱品は、雑貨、織物製品、硝子製品、陶磁器、薬品、食料品が中心であった（二五）。

フィリピンでは、戦前昭和期、日本人の商業事業者は中心地であるマニラに集中し、商社、卸売商、小売商があった。日本の商社には、大商社の支店の外に、フィリピンに本店を有する貿易商社も数社あった。小売商の取扱品は、日本製の綿布類、雑貨が中心であった。昭和五年当時、フィリピンでの日本人営業の商業は卸売商六十七軒、小売商千二百九軒あった（二六）。

タイでは、他の南洋諸国と比較すると日本人の商業事業者は少なかった。第一次大戦を契機とする日本品の進出に追従して、日本の商社の支店や出張所が、バンコクを中心として開設された。昭和十二年当時、タイでの日本人営業の商業は卸売商四十六軒、小売商百四十六軒あった（二七）。

仏領印度は、戦前昭和期、日本の商社の支店や出張所が、ハノイやサイゴンなどにあったが、日本人経営の小売商はきわめて少なかった。

昭和期の日本の南洋・南方への商業進出において、南洋協会の商業実習生制度も注目される。商業実習生制度とは、南洋協会が昭和四年から始めた南洋での商

業事業者を育成する制度である。応募資格は中等学校または専門学校卒業者で、長男でない者、親元または保証人に一定以上の資産を有することが条件となっていた。毎年全国の応募者から当初は十名程度、後に三十から四十名程度に増員され、選ばれた。実習生は、南洋の主に日系の商業企業や小売店に実習生として配属される。当初はジャワに配属されたが、第四回からは南方諸国に配属された。昭和十五年までに、派遣総数三九三名、そのうち南方で開業した者は四四名、実習中の者は二七五名、帰国者六四名、死亡者一〇名であった（二八）。

第二次大戦が勃発し、日本が南方アジアを占領するようになると、日本の百貨店などの大規模な小売企業が、軍の意向などにより、現地に進出するようになる。シンガポール（日本軍占領下では昭南島とよんだ）では、大丸、松坂屋、白木屋などの百貨店が進出した。伊勢丹は、インドネシアに進出した（二九）。松坂屋は、シンガポール、マレー、ジャワ、スマトラに進出し、百貨店、ホテル、製菓工場、農場などを経営した（三〇）。

第二章 戦前昭和期の南方への貿易

戦前昭和期の南洋・南方における日本との貿易につ

いてみてみよう。その貿易は、基本的には、ゴム、砂糖、コブラ等の農産物や錫、鉄鉱石、原油等の鉱産物を日本に輸出し、一方、織物、食料品、雑貨等の生活必需品や原料開発に必要な器械類その他工業製品を日本から輸入するという形であった。

日本からみた場合、南洋・南方は、日本の各種工業に必要な原料供給地であり、また、日本の工業製品の販売地となっている。すなわち、日本は、南洋・南方から生ゴム、麻、木材等の工業用原料、砂糖、コブラ等の農産物、鉄鉱石、錫、原油、石炭等の鉱物・油等を主に輸入し、南洋・南方は、日本から綿織物、絹織物、メリヤス、綿糸、絹織物等の繊維品や硝子、陶磁器、鉄製品、玩具等の雑貨を輸入していた。

日本と南洋・南方との貿易は、第一次大戦中頃から急速に発展した。それ以前は、メリヤス・絹織物が日本からの主要輸出品で、砂糖・米・麻・石油・錫等の南洋からの輸入が多く、日本から見ると南洋貿易は著しい輸入超過を続けていた。しかし、第一次大戦中、欧州と南洋との取引が途絶した機会に、日本商品は躍進的に進出し、第一次大戦後にはその貿易額は戦前の数倍に膨張し、一躍輸出超過に転じた。昭和六年、日本が金輸出再禁止を行ってからは、円価の下落という円安もあり、日本の輸出品は南洋・南方を席卷し、昭

和八年頃は、蘭印では欧米品をほとんど駆逐する状況となった。

このように急速に発展した日本と南洋・南方との貿易は、昭和十二年に空前の記録を作つて、日本からの輸出は三億八千六百七十五万円、南洋からの輸入は三億七千三百六十万円、合計七億六千万円程度で千四百万円の輸出超過となった^(三)。しかし、支那事変が勃発し、国際情勢が変化するに従い、自由であった南洋貿易は次第にブロック的な貿易に一変し、日本商品は漸次進出の余地を狭められると共に日本が最も必要とした重要物資である石油、錫、鉄鉱石、ゴム等の入手は極めて困難となった。とくに第二次世界大戦がおこつてからは、英・米勢力下にある南洋各地の貿易管理は強化され、日本の南洋貿易を著しく阻害するようになった。

第一節 日本と蘭領印度との貿易

蘭領印度は、貿易政策において、オランダ本国と他の諸国との間で、基本的には関税率に関して平等に取り扱い、オランダ本国に対して特惠関係を有しない政策を採つた。これは蘭領印度の主要輸出品である砂糖やゴムなどをオランダ本国市場のみで吸収出来ないこと、またオランダ本国の製造工業が蘭領印度の需要に

図表二 蘭領印度主要国別貿易

(単位 千盾)

年度	1929	1931	1933	1934	1935	1936*
輸 出						
歐 洲	528,068	268,897	182,891	204,260	185,421	221,681
オランダ	231,320	130,432	86,723	104,327	105,852	140,126
英 國	127,690	68,547	25,967	38,308	30,539	27,679
佛 國	59,535	23,452	19,441	17,203	14,472	13,130
獨逸	37,468	16,699	11,203	12,486	9,054	12,869
デンマーク	16,940	9,820	10,470	7,458	7,584	10,863
ベルギー及 ルクセンブルグ	11,206	5,816	7,038	5,147	3,036	5,063
ア ジ ア 洲	651,721	327,503	177,546	170,983	143,563	147,879
海 峽 植 民 地	330,361	155,845	86,240	98,226	74,086	72,363
日 本(内地及臺灣)	47,974	33,051	22,770	19,427	24,148	30,296
英 領 印 度	143,595	58,146	24,217	19,598	17,647	4,099
支 那	55,222	23,491	14,940	9,944	8,930	9,479
香 港	45,332	37,767	16,908	14,310	8,775	12,874
ア メ リ カ 洲	167,706	90,033	55,769	57,187	66,577	103,086
米 國	165,278	87,923	54,516	55,654	63,551	96,075
濠 洲 及 新 西 蘭	37,378	23,675	17,972	23,821	21,676	25,525
ア フ リ カ 洲	37,097	8,082	10,983	13,034	14,002	20,039
合 計	1,443,447	747,161	467,892	487,328	451,305	552,364
輸 入						
歐 洲	518,896	230,645	112,672	97,073	99,498	114,719
オランダ	213,505	98,557	39,354	37,951	36,388	47,115
英 國	117,313	43,941	30,640	23,573	22,780	22,133
獨逸	116,105	51,953	24,264	21,258	22,024	25,617
ベルギー及 ルクセンブルグ	19,068	8,731	5,502	3,954	5,948	7,048
ア ジ ア 洲	395,560	255,863	175,025	156,174	141,604	131,208
日 本(内地及臺灣)	114,869	92,551	98,715	92,916	82,092	75,318
海 峽 植 民 地	128,160	72,211	39,323	36,766	33,995	31,709
英 領 印 度	60,048	31,960	11,199	7,879	9,288	8,786
支 那	18,746	14,191	6,615	6,679	5,088	5,988
香 港	8,913	10,179	6,043	4,864	3,327	4,569
暹 羅	17,840	12,767	3,118	1,636	2,025	916
ア メ リ カ 洲	139,464	53,815	17,338	19,426	21,016	24,384
米 國	131,039	51,380	15,555	17,670	18,859	21,904
濠 洲 及 新 西 蘭	26,658	17,795	10,155	9,600	9,057	8,328
ア フ リ カ 洲	5,685	5,374	2,211	2,386	1,968	2,617
合 計	1,088,403	565,185	318,144	286,163	274,373	282,264

[註] Jaaroverzicht van den in-en Uitvoer van Nederlandsch-

Indië; The Netherlands Indies に據る

政府勘定を含み、金銀、旅客貨物、艦船消費物、郵便小包を含まず

* 金銀を含む、之に該當する 1935年分は輸出合計464,370千盾、輸

入合計274,220千盾

(出所：三菱経済研究所 (1937) 『太平洋に於ける国際経済関係』

三菱経済研究所、371頁)

図表三 蘭領印度国別主要輸出品

(單位 千盾)

年度	1929	1933	1934	1935	年度	1929	1933	1934	1935
	石油及同製品						砂 糖		
海峽植民地	79,636	29,682	28,480	24,265	英領印度	131,799	20,266	15,814	13,859
濠洲	13,418	7,279	9,396	9,598	日 本	26,129	8,633	5,435	4,988
地中海英領諸島	17,504	7,449	6,329	...	香 港	33,881	9,962	8,420	4,799
日 本	8,693	4,822	5,241	7,133	海峽植民地	15,239	3,868	3,318	2,245
支 那	11,302	7,653	5,456	5,500	濠洲	2,584	2,900	2,284	2,025
エジプト	244	899	1,266	5,338	支 那	40,861	5,417	3,034	1,845
香 港	7,042	4,571	4,004	2,326	エジプト	28,634	3,093	1,273	621
英 國	2,198	2,317	2,180	1,473	合計(含其他)	306,957	61,132	44,748	35,147
合計(含其他)	178,967	103,712	98,842	86,496	煙 草				
ゴ ム					オランダ	81,471	30,168	36,403	28,864
米 國	88,567	11,778	22,950	25,408	合計(含其他)	83,281	32,005	37,005	29,258
海峽植民地	83,875	11,604	30,926	13,915	コ プ ラ				
英 國	32,048	3,018	13,571	11,231	オランダ	27,991	7,790	3,690	7,673
オランダ	10,189	2,188	5,596	5,302	海峽植民地	14,440	6,453	3,032	5,797
日 本	2,612	2,172	4,268	4,133	デンマーク	9,195	6,651	4,361	4,402
獨逸	412	2,364	4,012	3,154	獨逸	19,335	4,417	2,685	2,447
合計(含其他)	237,302	37,219	88,399	70,001	合計(含其他)	97,602	38,374	16,849	26,000
茶					珈 琲				
英 國	43,112	8,306	12,432	9,385	オランダ	16,094	5,478	3,473	3,613
オランダ	19,320	6,760	10,992	8,313	佛 國	16,270	6,028	1,453	5,014
濠洲	10,877	4,988	9,498	7,209	海峽植民地	6,146	2,501	1,873	1,959
米 國	2,833	2,464	3,949	3,974	合計(含其他)	69,520	25,627	22,505	18,654
エジプト	10,877	1,157	3,235	2,901	バーム・オイル				
合計(含其他)	86,071	26,361	44,890	36,710	米 國	7,421	7,276	2,989	9,242
錫及錫鐵					オランダ	1,266	1,417	1,846	2,845
オランダ	19,880	12,048	23,702	26,161	合計(含其他)	11,177	10,693	8,717	13,637
米 國	572	1,898	3,414	4,050	胡 椒	48,340	13,309	15,319	11,673
佛 國	2,687	1,226	1,453	2,528	規 矩	10,389	6,378	6,459	7,710
英 國	8,310	731	318	1,797	植 物 纖維	20,551	8,557	5,811	7,293
海峽植民地	45,926	2,380	576	58	タビオカ	21,050	8,563	7,141	6,904
合計(含其他)	79,270	22,370	32,709	36,109	カボツク	13,421	7,451	6,031	6,271

[註] Jaaroverzicht van den in-en Uitvoer van Nederlandsch-Indië に據る

(出所：三菱經濟研究所 (1937) 『太平洋に於ける國際經濟關係』
三菱經濟研究所、373頁)

図表四 蘭領印度国別主要輸入品

(單位 千盾)

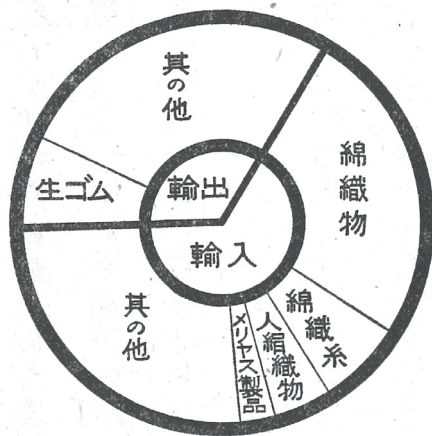
年度	1929	1933	1934	1935	年度	1929	1933	1934	1935
綿織物 (含サロン)					米				
日本	47,294	47,719	44,634	36,323	海峽植民地	26,296	6,409	4,657	6,674
オランダ	46,386	4,514	6,166	7,168	英領印度	32,011	5,251	3,513	5,296
英國	41,223	4,182	2,661	1,992	佛領印度支那	29,572	3,678	1,402	3,157
海峽植民地	15,597	4,968	2,899	784	暹羅	16,284	3,004	1,481	1,921
合計 (含其他)	172,136	64,158	58,434	48,005	合計 (含其他)	104,408	18,375	11,075	17,077
食料品					紙及同製品				
海峽植民地	35,852	14,938	15,978	14,271	オランダ	8,188	3,144	2,775	2,245
オランダ	11,862	5,027	4,014	4,005	米	2,831	1,044	1,360	1,041
濠洲	9,083	4,349	3,819	3,664	日本	1,698	1,083	838	1,012
日本	1,708	2,077	2,315	2,305	合計 (含其他)	24,223	10,580	10,026	9,672
合計 (含其他)	88,644	36,677	34,510	31,022	絲類				
機械及器具					日本	2,273	2,228	2,590	4,574
オランダ	34,112	4,432	5,068	4,656	英國	3,829	2,384	1,688	1,629
獨逸	25,924	3,613	3,408	4,554	合計 (含其他)	13,640	7,997	7,744	8,581
英國	23,233	2,401	3,279	4,527	藥品				
英國	11,927	1,621	2,150	1,937	獨逸	2,928	2,083	1,564	1,704
日本	593	827	1,155	1,220	日本	878	814	1,303	1,140
合計 (含其他)	102,272	15,125	17,182	19,406	合計 (含其他)	14,991	8,639	7,823	7,300
鐵鋼及同製品					衣服及裝身具				
日本	5,006	5,182	5,610	5,889	煙草	20,743	9,146	7,654	7,175
獨逸	24,950	3,221	4,000	3,353	自動車及同部分品	38,006	10,416	7,860	5,943
ベルギー及ルクセンブルグ	8,459	2,520	1,917	3,065	化學製品	36,330	5,134	4,297	5,772
オランダ	20,726	1,878	1,552	1,615	染料及塗料	14,991	4,510	4,722	5,063
英國	15,336	348	1,053	1,564	石油製品	10,981	5,335	5,176	5,047
合計 (含其他)	88,644	15,223	15,895	18,412	小麥粉	18,398	6,425	6,210	4,905
各種織物 (含紗)					鐵力及同製品	14,167	4,357	4,491	4,458
日本	9,190	12,167	10,475	8,391	自動車及同部分品	10,272	4,548	4,551	4,200
英領印度	21,218	4,757	3,566	3,201	麥酒及酒類	15,106	4,614	4,297	4,120
英國	6,319	2,118	1,149	1,175	自轉車及同部分品	15,569	7,090	3,864	3,734
海峽植民地	6,847	1,312	1,211	1,142	肥料	9,469	3,152	4,795	3,484
オランダ	6,090	1,339	1,123	899		24,929	2,970	3,775	3,431
合計 (含其他)	61,540	24,582	19,572	17,370					

[註] Jaaroverzicht van den in- en uitvoer van Nederlandsch-Indië に據る

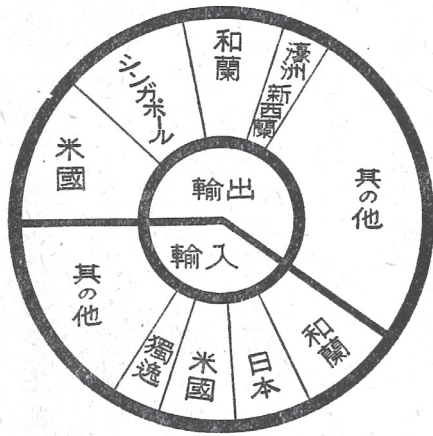
(出所：三菱經濟研究所 (1937) 『太平洋に於ける國際經濟關係』
三菱經濟研究所、377頁)

応じきれないこと、などのためである。このために、蘭領印度は、国内産業の保護、オランダ本国の優位確保、対外貿易の調整等の目的を、関税によるのではなく輸入制限によって達成するという政策を採った⁽¹¹¹⁾。日本との関係では、戦前昭和期において、蘭領印度は最も重要な貿易相手国であった。

図表二は、昭和四（一九二九）年から昭和十一（一九三六）年までの蘭領印度の主要貿易相手国の推移をみたものである。図表三は、昭和四（一九二九）年から昭和十（一九三五）年までの蘭領印度の主要国別主要輸出品の推移をみたものである。図表四は、昭和四（一九二九）年から昭和十（一九三五）年までの蘭領印度の主要国別主要輸入品目の推移をみたものである。蘭領印度の輸出貿易における主要な相手国はオランダ本国、海峡植民地（シンガポール、英領マレー、ペナン）、アメリカ、イギリス、日本、豪州等である。輸出品目は、石油、ゴム、茶、錫、砂糖、煙草、コブラ、コーヒー、パームオイル、胡椒等の農産物を主とし、これらの輸出額は一九三五年総輸出額の八十二%を占めた。蘭領印度の輸入品は、綿織物を第一とし、食料品がこれに続き、その他機械器具、鉄鋼および同製品、各種織物、米、紙および同製品、糸類、薬品等が主要なもので、これらの九品目の合計額は、昭和十



図表六 蘭印の対日貿易額品種別の図 (昭和14年)



図表五 蘭印の主要相手国貿易額の図 (昭和14年)

(出所：台湾南方協会 (1941) 『南方読本』三省堂、188 - 189頁)

(出所：台湾南方協会 (1941) 『南方読本』三省堂、186頁)

(一九三五)年において総輸入額の六十四%を占めている。

【表五】は、昭和十四年における蘭領印度の主要相手国貿易額の図である。【表六】は、昭和十四年における蘭領印度の対日貿易額による品種別割合をみたものである。蘭領印度が輸出する主なものは昭和十四年においては農産物ではゴムを筆頭に砂糖、茶、コブラ、煙草、キナ等で、鉱産物では石油を第一とし次いで錫等である。輸入品は綿織物などの繊維品を最大とし、食料品、機械器具、金属製品、化学製品等が主なものである。昭和十四年における蘭印の日本よりの輸入は綿織物が第一位、綿糸、人絹等の繊維工業品、自転車等の金属工業品がこれに次ぎ、他は陶磁器、硝子、セメント等であり、輸出はゴム、石油、木材、錫、キナ等であった。貿易額は日本よりの輸入は一億三千七百八十万円、日本への輸出は七千六百六十三万円、六千六百万円の輸入超過であった。昭和十四年における蘭印からの輸出の中の日本の割合は、三・四%、その輸入の中の日本の割合は、十八・九%であった。

日本が蘭領印度の貿易に確固たる地位を占めたのは、第一次大戦からで、その直前において、日本は蘭印輸入貿易の中でわずか一・三%を占めるにすぎなかったが、大戦中一〇%に躍進し、昭和六年からは綿織物の進出

が著しく、遂に一七%を占めてオランダに代り第一位となった。その後、日本の輸出超過が続き、昭和八年では、日本からの蘭印への輸出が一億円も多いという方貿易で、その後、五、六千万円の出超尻を続けていた。このためオランダ本国からの輸出は大打撃を蒙ったので、蘭領印度当局は日本よりの輸入割当制を実施し、さらに日本人の営業や入国を制限する等、いろいろな方法をとって日本品の進出を抑圧するようになった。

ところが蘭領印度の貿易は第二次大戦の勃発によって大打撃を受け、貿易上の一大転換を余儀なくされた。この変化は昭和十五年に入ってから次第に顕著となり、オランダ本国はじめ欧州向輸出が激減し、これに代ってアメリカ、シンガポール、豪州、インド等への輸出が増大した。また輸入においても、ドイツのオランダ侵入以後はオランダからの輸入は杜絶し、アメリカの鉄鋼、機械類と日本の綿製品の進出が著しくなった。

アメリカの輸出入貿易に占める割合は、【表三】のように昭和十四年から高まり、昭和十五年に入ってからゴム、錫の買付が特に増大し、またアメリカからの輸出も激増して遂に日本の地位を奪うに至った。蘭領印度とアメリカは貿易上の相互依存関係を次第に深めつつあった。一九四一(昭和十六)年、蘭領印度政府は英米に追従して日本と蘭領印度間の為替取引交換を

図表七 英領マレー主要国別貿易

(単位 千弗)

	1929	1932	1933	1934	1935	1936	1936年に 於ける 百分率
輸出貿易							
英 國	132,999	58,495	55,261	107,294	93,972	56,341	(8.8)
英領諸國	105,756	59,974	50,221	67,215	81,250	94,449	(14.8)
歐洲大陸	119,799	49,579	65,383	87,944	74,538	76,361	(12.0)
米 國	393,207	72,361	125,292	18,555	213,588	295,609	(46.4)
日 本	36,667	38,940	35,131	51,381	52,685	48,207	(7.6)
(%)	(4.0)	(10.6)	(8.7)	(9.0)	(9.0)		
蘭領印度	139,051	85,023	41,508	36,452	38,658	38,873	(6.1)
其他諸國			27,049	27,798	27,261	27,232	(4.3)
計	927,480	364,372	399,845	566,640	581,951	637,073	(100.0)
輸入貿易							
英 國	147,679	55,691	50,904	67,339	75,118	77,263	(15.2)
英領諸國	173,642	67,939	65,170	72,230	82,007	84,555	(16.6)
歐洲大陸	69,372	21,080	16,730	19,925	22,555	23,946	(4.7)
米 國	32,863	7,287	5,568	8,257	9,120	9,359	(1.8)
日 本	23,189	17,033	26,590	37,502	30,405	32,546	(6.4)
(%)	(2.6)	(4.4)	(7.3)	(8.0)			
蘭領印度	450,876	211,119	110,607	159,799	150,454	161,470	(31.8)
其他諸國			82,263	102,104	105,828	118,929	(23.4)
計	897,622	380,149	357,832	467,156	475,488	508,068	(100.0)

〔註〕 小包郵便を含まず

(出所：三菱経済研究所 (1937) 『太平洋に於ける国際経済関係』
三菱経済研究所、320頁)

図表八 蘭領印度主要商品別貿易

	數 量					價 額 (單位 千弗)				
	1929	1932	1934	1935	1936	1929	1932	1934	1935	1936
主要輸出品										
ゴ ム (千 噸)	577	478	677	590	520	432,644	77,803	279,640	259,094	303,315
錫 (シ)	102	48	50	62	83	182,129	55,687	96,724	117,294	141,353
コ プ ラ (シ)	199	197	190	217	196	32,525	19,147	9,980	16,856	19,037
米 (シ)	230	183	166	184	182	27,550	12,605	8,610	11,061	10,846
バイナツプル 雜詰 (シ)	59	66	67	74	76	9,234	7,915	7,027	8,331	8,687
檳 榔 子 (シ)	72	58	66	65	72	14,411	6,095	5,473	6,702	7,527
魚 (乾物及鹽物) (シ)	55	47	50	46	49	13,990	8,420	7,269	6,494	6,985
綿 織 物 (百萬碼)	40	51	50	43	37	9,335	5,731	5,167	4,331	3,630
胡 椒 (千 噸)	13	16	20	23	11	17,656	6,592	11,156	12,268	2,567
タ ビ オ カ (シ)	32	32	27	24	24	3,853	2,157	2,407	2,157	1,939
籐 (シ)	15	11	11	13	12	3,820	1,735	1,738	1,968	1,762
計 (其他を含む)	931,568	367,599	568,487	583,987	368,768
主要輸入品										
ゴ ム (千 噸)	162	93	211	175	168	81,285	9,740	71,770	67,966	94,834
米 (シ)	786	592	619	655	716	95,461	39,729	32,814	40,115	43,054
錫 鐵 及 精 鐵 (シ)	49	28	22	22	27	62,814	22,743	28,617	27,682	30,665
卷 煙 草 (千 封 度)	11,368	5,160	8,982	9,786	11,123	27,443	10,624	13,389	14,359	14,530
綿 織 物 (百萬碼)	167	150	144	104	114	38,562	17,618	16,894	13,483	14,301
コ プ ラ (千 噸)	86	100	95	106	120	13,226	8,380	4,115	7,336	10,802
機 械 (千 個)	337	46	50	48	66	21,559	5,170	5,391	8,061	10,686
煉乳及殺菌乳 (千 箱)	1,549	846	1,122	1,238	1,292	15,896	7,883	7,167	7,779	7,911
砂 糖 (千 噸)	114	97	106	116	128	12,316	7,103	6,702	6,760	7,377
魚 (乾物及鹽物) (シ)	47	43	53	45	49	13,174	6,368	7,803	6,806	7,164
石 炭 (シ)	830	539	556	577	589	9,614	4,445	4,080	4,368	4,237
綿 サ ロ ン (百萬碼)	10	8	7	13	15	13,219	5,468	4,019	3,345	3,585
計 (其他を含む)	906,151	384,259	471,434	478,910	512,900

(出所：三菱經濟研究所 (1937) 『太平洋に於ける國際經濟關係』
三菱經濟研究所、319頁)

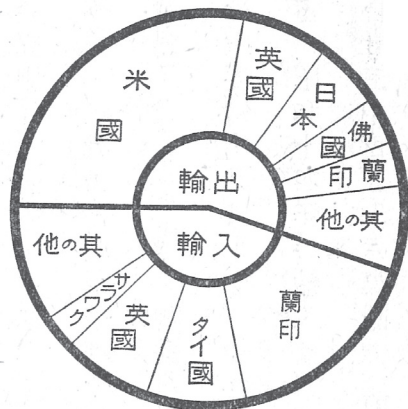
停止、および日本・満州・支那・仏印への輸出と日本よりの輸入を許可制とし、日本との貿易関係を制限した。

第二節 日本と英領マレーとの貿易

戦前昭和期において、世界有数の中継貿易港シンガポールを擁する英領マレーと日本との貿易関係は、第一次大戦を契機として急速に進展した。綿織物を主とする日本商品の進出があまりに急激であったため、イギリスは自国製品が駆逐されることを恐れ、昭和九年七月日本製の織物類に対し輸入割当を実施した。

この結果、日本商品は全面的に大打撃を受けた。支那事変の発生に伴って起った華僑の日貨排斥は南洋華僑の中心地だけに猛烈を極め、イギリスの対日圧迫と共に日本のマレー貿易に二重の打撃を与えた。

図表七は、昭和四（一九二九）年から昭和十一（一九三六）年までの英領マレーの主要貿易相手国の推移をみたものである。図表八は、昭和四（一九二九）年から昭和十一（一九三六）年までの英領マレーの主要商品別貿易の推移をみたものである。英領マレーの貿易を相手国先に見ると、輸出ではアメリカが第一であり、輸入では英領諸国が第一である。また、日本への輸出は、一九二九年の約三千七百万ドルから、



図表九 英領マレーの主要相手国別貿易の図 (昭和14年)

(出所：台湾南方協会 (1941) 『南方読本』三省堂、194頁)

一九三六年には約四千八百万ドルに増加している。輸出品目をみると、ゴムが最も多く、一九三六年には約三億三千万ドルに達し、輸出総額の四七・五%を占めた。これに続く輸出品は錫で約一億四千万ドル、輸出総額の二十二・一%に及んだ。このゴムと錫で輸出総額の七割を占めている (三三)。

図表九は、昭和十四年における英領マレーの主要相手国貿易額の図である。マレーは、輸出では米、英國、日本の順で、輸入では蘭印、タイ、英國の順である。輸出では圧倒的に米国が多く、輸入では蘭印が最も多い。

日本は、戦前昭和期において、近代工業と軍需に不可欠のゴム、錫をはじめ鉄鋼石、燐鉱石、石油等をかなり多量に輸入し、日本はマレー貿易で莫大な輸入超過であった。昭和十四年、英領マレーが日本から輸入した商品は綿糸および綿製品、人絹類などの繊維品が全体の半分近くを占め、石炭がこれに次ぎ、他は雑貨類である。同年のマレーからみる貿易額は日本からの輸入二千二百四十三万円、日本への輸出一億一千五百八十四万円、九千三百四十万円の輸出超過であった。

第三節 日本とフィリピンとの貿易

フィリピンは元来農業国であり、その輸出品は、砂糖を始め、コブラ、麻、ヤシ油、葉煙草、漁業品、木材等の農水産物や木材が中心である。

図表一〇は、昭和四（一九二九）年から昭和十一（一九三六）年までのフィリピンの輸出入貿易の推移をみたものである。図表一一は、昭和四（一九二九）年から昭和十一（一九三六）年までのフィリピンの主要商品別貿易の推移をみたものである。フィリピンの貿易を相手国先に見ると、輸出入ともアメリカの比重が高い。輸出品目をみると、砂糖が最も多く、これに次いで、麻、椰子油、コブラ、煙草、などがある。フィ

図表10 フィリピンの輸出入貿易

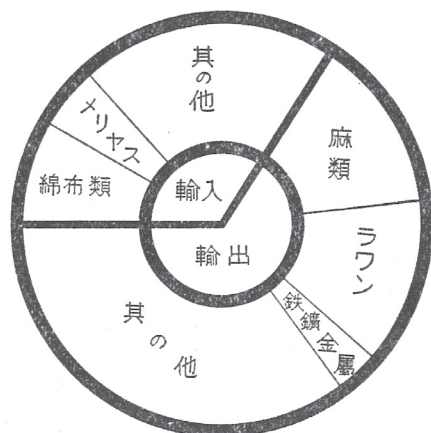
	金額、(百萬ペソ)						総額に對する割合(%)		
	1929	1932	1933	1934	1935	1936	1929	1932	1936
輸出									
米	248.9	165.3	182.6	183.7	149.9	215.1	75.7	86.7	78.8
其他	80.0	25.4	28.9	37.1	38.6	57.8	24.3	13.3	21.2
日本	14.3	5.1	5.9	8.5	10.7	16.8	4.3	2.7	6.2
英	14.1	2.7	3.7	4.9	5.8	8.3	4.3	1.4	3.0
獨逸	12.4	7.3	4.4	1.9	5.4	4.2	3.8	3.8	1.5
佛	7.1	1.9	1.9	2.1	1.8	3.8	2.2	1.0	1.4
支那	4.5	2.0	4.3	5.2	2.2	3.2	1.4	1.0	1.2
總計(其他を含む)	6.4	1.1	1.7	2.2	1.8	2.0	1.9	0.6	0.7
輸出	328.9	190.7	211.5	220.8	188.5	272.9	100.0	100.0	100.0
輸入									
米	185.2	102.6	87.1	108.8	108.7	123.0	62.9	64.6	60.8
日本	23.9	12.3	11.4	20.7	24.3	26.5	8.1	7.8	13.1
獨逸	9.7	6.7	5.7	7.3	5.1	6.9	3.3	4.2	3.4
支那	14.2	10.8	6.9	5.9	5.6	5.4	4.8	6.8	2.7
英	11.5	5.5	4.1	4.2	3.5	5.0	3.9	3.5	2.5
獨逸	4.3	2.2	2.2	2.1	2.9	4.7	1.5	1.4	2.3
佛	1.2	0.8	1.3	0.9	2.6	4.5	0.4	0.5	2.2
支那	7.2	3.7	3.0	3.8	3.4	3.7	2.4	2.3	1.8
獨逸	6.3	3.3	2.8	2.9	3.7	3.4	2.2	2.1	1.7
佛	0.6	0.7	0.7	1.3	1.8	2.4	0.2	0.4	1.2
支那	3.3	1.7	1.3	1.8	1.8	2.1	1.1	1.1	1.0
獨逸	2.5	1.7	1.6	1.9	1.4	2.0	0.9	1.1	1.0
輸入	294.3	158.8	134.7	167.2	171.0	202.3	100.0	100.0	100.0

(出所：三菱經濟研究所 (1937)『太平洋に於ける國際經濟關係』三菱經濟研究所、392頁)

(出所：三菱経済研究所 (1937) 『太平洋に於ける国際経済関係』三菱経済研究所、394頁)

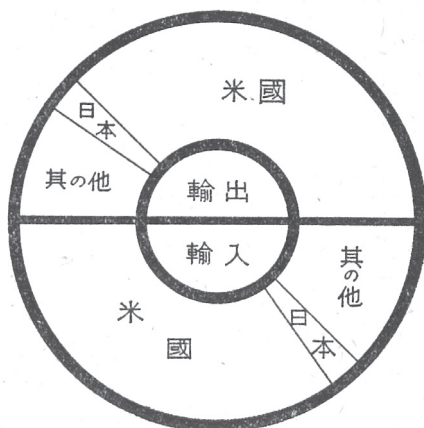
年 度		1929	1932	1933	1934	1935	1936
輸 出 貿 易	砂糖	106.5	119.6	128.7	130.9	66.0	123.9
	椰子油	58.4	15.3	18.3	13.6	24.5	27.6
	アバカ(麻)	56.8	10.0	13.7	17.3	22.9	34.2
	タバコ	31.1	10.3	17.9	17.2	22.0	30.0
	煙刺	17.6	12.8	10.4	10.4	12.0	10.5
	乾燥椰子	12.0	6.7	3.8	5.3	10.1	8.4
	木コ	7.1	3.2	3.4	4.5	7.9	8.8
	網具	7.2	1.7	2.5	4.3	5.0	6.2
	綿織品	7.6	2.1	2.1	2.1	3.3	3.7
	製鋼品	3.8	1.3	1.8	2.7	2.3	2.3
輸 入 貿 易	綿織品	54.0	33.5	26.3	31.2	30.6	30.5
	鐵鋼及機械	43.8	20.0	17.3	22.8	22.2	32.0
	礦油	19.8	13.7	11.3	12.8	15.3	15.4
	肉及乳製品	13.8	8.1	6.5	8.2	9.3	11.0
	自動車及同部分	15.3	8.1	7.1	10.3	9.2	11.4
	煙草	6.5	5.4	4.2	5.9	7.5	7.1
	紙及同製品	8.5	5.5	4.6	6.4	6.6	6.4
	小麦粉	10.1	4.9	4.4	5.2	5.7	7.9
	化學藥、醫藥及染料	5.1	3.9	3.8	4.8	5.2	5.6
	絹、入絹及同製品	9.3	5.0	4.0	4.6	4.9	5.8

図表一 フィリピン主要商品別貿易



図表13 フィリピンの対日貿易額品種別の図 (昭和14年)

(出所：台湾南方協会 (1941) 『南方読本』三省堂、195頁)



図表12 フィリピンの主要相手国別貿易額の図 (昭和14年)

(出所：台湾南方協会 (1941) 『南方読本』三省堂、195頁)

フィリピンの主要輸入品は、綿製品、鉄鋼および同製品（機械を含む）などである（二四）。

図表一二は、昭和十四年におけるフィリピンの主要相手国貿易額の図であり、図表一三は、フィリピンの対日貿易額品種別の図である。戦前昭和期の昭和十四年において、フィリピンの貿易に占めるアメリカの地位は圧倒的で、輸出では八割程度、輸入においては七割程度を占めていた。つまり、フィリピンはアメリカへの農産物供給国であるとともに、アメリカ製品の市場ともなっていた。

日本は、この時期、輸出入とも第二位にあるが、アメリカの一割に過ぎない。アメリカが貿易の多くを占めているのは、属領という政治的關係から自由貿易制を採り、フィリピンの対米輸出には開税を掛けないようにしているためである。

日本とフィリピンの貿易は、他の南洋・南方諸国と同様に、第一次大戦以後に急速に発展した。しかし昭和十二（一九三三）年の支那事変の勃発により華僑の日貨排斥に遭い、日本からの輸出は激減し、著しく入超を示すに至った。フィリピンは、日本からの主な輸入品は綿糸布、綿織物、絹、人絹織物が過半を占め、ガラス、陶磁器、紙等で、輸出品はマニラ麻・木材を主とし、鉄鋼および金属、葉煙草、革等

ある。昭和十四年における貿易額は、日本からの輸入二千四百七十四万円、日本への輸出四千九百十二万円、二千四百三十八万円の輸出超過であった。しかし、昭和十六年になると、アメリカは対日経済圧迫のために、フィリピンの重要輸出品についてアメリカ領以外への輸出をほとんど禁止した。

第四節 日本と仏領印度支那との貿易

仏領印度支那はその貿易において極端なフランス本国偏重の政策を採った。仏領印度支那は、関税制度上準本国としての取扱を受け、フランス本国との貿易においては相互的に無関税で、外国よりの輸入に対しては最高最低の複税率制度を採用しており、そのためフランス本国との貿易はきわめて密接であったが、他の国に対しては貿易障壁を設けていた（二五）。

図表十四は、昭和二（一九二七）年から昭和十一（一九三六）年までの仏領印度支那の主要貿易相手国の推移をみたものである。図表十五は、昭和八（一九三三）年から昭和一〇（一九三五）年までの仏領印度支那の主要商品国別輸入額の推移をみたものである。仏領印度支那の輸

(單位 百萬法)

図表 14 仏領印度支那の主要貿易相手国

	輸				出				輸				入							
	1927		1933		1934		1935		1936		1927		1933		1934		1935		1936	
佛領	606	481.2	523.0	432.7	922.7	1,269	486.2	525.3	500.0	523.3	77	33.5	20.0	27.3	28.7	27.3	28.7	25.9	4.9	7.6
佛領	28	28.5	44.3	53.6	702.6	43	12.7	17.9	14.0	14.6	5	5.7	1.9	3.5	3.5	3.5	3.5	4.9	7.6	9.9
英獨	67	11.5	15.6	13.2	23.5	9	12.4	4.2	5.3	10.9	10	12.7	14.6	10.9	9.9	7.4	7.4	7.4	7.6	7.6
獨	22	5.9	5.9	7.3	12.8	39	20.3	38.5	38.8	38.8	229	35.3	90.2	72.0	72.8	72.0	72.0	72.8	72.8	72.8
オ	...	5.5	5.9	7.3	12.8	314	92.6	6.1	7.3	29.2	150	71.2	65.6	54.4	57.3	54.4	54.4	57.3	57.3	57.3
ベ	51	5.4	12.1	13.7	8.6	92	6.1	5.1	13.6	15.1	14	5.1	5.5	13.6	15.1	13.6	13.6	15.1	15.1	15.1
其	17	0.5	5.0	8.2	4.1	126	42.9	0.1	0.2	0.1	1	0.1	1.9	0.2	0.1	0.2	0.2	0.1	0.1	0.1
支	468	43.8	58.3	197.3	50.6	67	19.3	22.3	26.3	26.3	...	37.0	22.3	26.3	26.3	26.3	26.3	26.3	26.3	26.3
香	935	242.0	149.8	225.1	145.4	...	37.0	14.2	13.3	13.3	...	0.6	14.2	13.3	13.3	13.3	13.3	13.3	13.3	13.3
英	9	7.1	32.1	38.9	28.9	...	0.6	0.2	0.2	0.2	...	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2
蘭	76	28.9	17.5	28.5	8.3	...	0.2	5.0	11.5	11.5	...	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2
暹	26	9.9	8.7	6.9	6.1	...	0.2	5.0	11.5	11.5	...	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2
シ	321	80.7	84.2	102.0	108.5	...	0.2	5.0	11.5	11.5	...	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2
比	3	0.4	0.7	5.0	28.4	...	0.2	5.0	11.5	11.5	...	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2
日	294	45.2	40.9	54.1	78.3	...	0.2	5.0	11.5	11.5	...	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2
其他	...	13.9	15.2	15.4	19.7	...	0.2	5.0	11.5	11.5	...	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2
ア	...	4.3	11.7	4.4	10.5	...	0.2	5.0	11.5	11.5	...	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2
マ	...	3.4	4.3	3.7	3.7	...	0.2	5.0	11.5	11.5	...	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2
ア	...	11.3	18.2	40.4	63.0	...	0.2	5.0	11.5	11.5	...	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2
其	20	7.6	37.9	55.8	107.1	...	0.2	5.0	11.5	11.5	...	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2
米	33	1.1	5.3	9.3	5.7	...	0.2	5.0	11.5	11.5	...	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2
其	...	1.1	5.3	9.3	5.7	...	0.2	5.0	11.5	11.5	...	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2
合	2,981	1,014.5	1,060.6	1,298.3	1,681.9	2,616	910.8	914.2	901.4	914.2	2,616	910.8	914.2	901.4	914.2	901.4	914.2	901.4	914.2	914.2

[註] (1) 國別不詳分を含む

(出所：三菱経済研究所 (1937) 『太平洋に於ける国際経済関係』 三菱経済研究所、416頁)

図表 16 仏領印度支那の主要商品別輸入額 (単位 百萬法)

年度	1933	1934	1935
綿織物	153.4	166.1	150.2
佛領植民地	137.3	154.0	137.5
佛領支那	12.0	7.2	6.4
麻織物	1.7	3.2	3.1
香港	41.9	49.5	59.9
シンガポール	8.2	9.0	13.1
礦油	31.7	39.7	44.1
佛領印度	74.6	65.4	54.4
蘭領印度	58.1	56.9	48.0
金屬製品	10.3	6.7	6.2
佛國	41.1	51.5	42.8
英國	35.4	45.2	37.4
獨逸	0.6	0.5	1.6
日本	2.2	0.7	1.0
機械類	1.1	0.3	0.9
佛國	0.4	0.3	0.6
英國	60.6	32.2	39.2
獨逸	53.8	27.0	31.0
日本	1.9	0.8	2.1
鐵鋼	1.1	1.0	1.3
佛國	26.7	46.8	36.7
英國	19.2	37.9	28.9
獨逸	4.6	3.9	4.2
日本	2.6	3.9	1.7

図表 15 仏領印度支那の主要商品別輸出額 (単位 百萬法)

年度	1933	1934	1935
米	478.9	451.1	648.1
支那	10.0	38.0	171.7
香港	176.5	92.0	158.5
佛國	211.7	205.3	144.3
玉蜀黍	152.9	197.4	144.9
佛國	152.7	189.4	132.4
ゴム	56.4	94.1	136.9
佛國	22.9	33.5	48.3
米	2.0	27.1	45.1
日本	12.6	10.1	13.7
シンガポール	13.2	14.5	8.5
石炭	62.7	55.9	68.8
日本	18.3	29.0	24.1
佛國	18.0	18.4	23.4
支那	19.5	10.0	8.3
魚類	62.5	51.4	53.1
シンガポール	41.6	36.2	38.7
香港	14.0	8.5	10.5
錫	10.9	15.1	17.4
米	4.4	7.3	8.6
佛國	5.9	5.7	4.6
錫	15.6	22.3	26.1
シンガポール	13.6	20.4	22.9

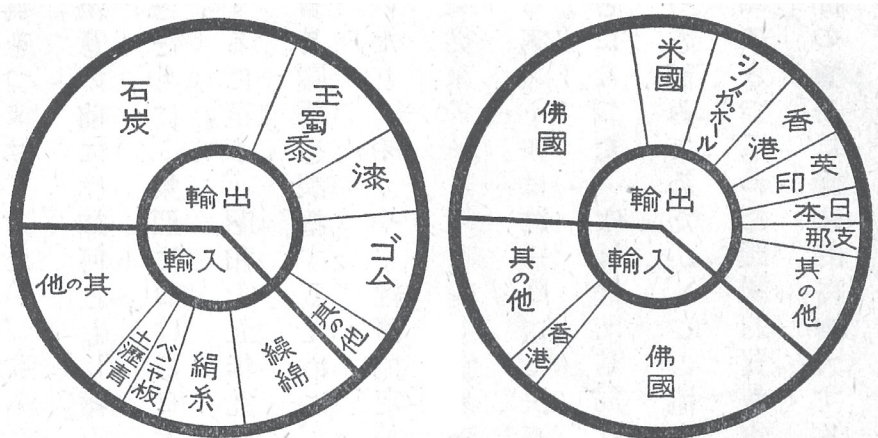
(出所：三菱経済研究所 (1937) 『太平洋に於ける国際経済関係』 三菱経済研究所、418頁)

(出所：三菱経済研究所 (1937) 『太平洋に於ける国際経済関係』 三菱経済研究所、417頁)

出貿易における主要な相手国は、輸出入ともフランスが圧倒的である。輸出品目をみると、米が最も多く、これに次いで、トウモロコシ、ゴム、石炭、魚類、錫等を主とし、これらの輸出額は昭和一一(一九三六)年総輸出額の八十八・二%を占めた。仏領印度支那の輸入品は、綿織物を第一とし、麻織物、金属製品、機械類、鉄鋼、鉱油、綿花、紙、自動車、ぶどう酒がこれに続き、これらの品目の合計額は、昭和一〇(一九三五)年において総輸入額の五十二・五%を占めている(二六)。

図表十七は、昭和十四年における仏領印度支那の主要相手国貿易額の図と、仏領印度支那の対日貿易額品種別の図である。輸出入ともにフランスが圧倒的に優勢で、輸出の三割以上、輸入の七割近くを占めている。昭和十四年の仏領印度支那の輸出は、米が全体の約四〇%で、その首位を占め、これに次ぐものはトウモロコ

図表17 仏領印度支那の貿易（昭和14年）



対日貿易額品種別の図

主要相手国貿易額の図

(出所：台湾南方協会（1941）『南方読本』三省堂、191頁）

シ、ゴム、石炭、魚類、錫等であり、輸入は綿織物が第一で麻袋、金属製品、機械、鋼油等がこれに次ぐ。貿易は第一位のフランスを除くと、主な輸出入はアメリカ、シンガポール、香港、英印、日本、輸入先は香港、印度、蘭印、日本の順位で、イギリス、アメリカとの取引がかなり密接である。

日本の仏領印度支那との貿易は、はじめから仏印政府当局の排他的な本国偏重の貿易政策によって、日本商品は不利な待遇を受けていた。昭和七年に成立した通商協定によって一時緩和されたが、これも永続せず昭和九年の関税改正においてさらに一層苛酷な圧迫を加へられた。日本と仏領印度支那との貿易関係は、明治以来、他の南洋・南方諸国に比較して低調であった。

昭和十四年、仏領印度支那が日本から輸入した主要品目は、第一位は緑綿、以下、ベニヤ板、絹糸、陶磁器およびガラス、アスファルト・ピッチ、絹および人絹織物、ジャガイも等がこれに次いだ。輸出品の主なものは、第一位は石炭、以下、ゴム、トウモロコシ等であった。日本との貿易額は、日本からの輸入千九百八十万円、日本への輸出二千六百六十五万円で、六百八十五万円の輸出超過であった。

昭和十五年九月に日本は仏領印度支那に軍が進駐し、昭和十六年一月に日本と仏領印度支那との貿易関係を

調整するために日仏印東京会談が開始され、同年五月に日・仏印経済協定が成立し、相互に貿易商品に対して最低税率を課すか免税とし、また、従来アメリカドルで貿易決済をしていたのを、直接に円とピアストル（仏印の貨幣単位で一ピアストルは約一円）で決済をし、決算尻が五百万円を超える毎に外貨で超過金額を支払うということになった。また、仏印当局は仏印輸入組合を設け、種々の条件を付して日本商社の組合加入を妨げようと試みていたが、この協定によって緩和された。すなわち、日本で南洋貿易会を設けて対仏印重要輸入品に付き代行商社制を採用し、また、現地では日本商社が仏印輸入組合に加盟するとともに、日本人輸入同業会を組織した。これにより、仏印から日本へのゴム、米、石炭等の輸出が増えた^{三七}。

第五節 日本とタイとの貿易

タイは、南洋・南方アジアの中で、唯一植民地化されなかつた独立国家であつた。その理由は、タイは長い歴史を持つ王政を採る国家であつたこと、イギリスやフランスなどの欧米列強がその植民地をめぐる政治的対立を避けるためタイを緩衝地にしようと思つたことなどである。すなわち、一八九六年の英仏宣言および一九〇四年の英仏協定によりタイにおける英仏の

政治上の地位を確立するとともに、タイの独立が保護されるにいたつた。タイは、伝統的にコメを中心とする農業国家である。そのため、タイは、基本的に農産物を輸出し、完成品などを輸入する構造となつて来た。日本とタイとは貿易において、古くから関係を持つていた。しかし、戦前昭和期において、必ずしも日本とタイとの貿易は活発ではなかつた。それは、タイの貿易が米に依存しているため米産の消長に左右されていること、国内開発が主としてイギリス資本によつてなされ、貿易もその圧迫を受けていること、華僑が商業の実権を握り支那事変以来日貨排斥を行っていることのためである。

図表十八は、昭和二（一九二七）年から昭和十一（一九三六）年までのタイの主要貿易相手国の推移をみたものである。図表十九は、昭和二（一九二七）年から昭和十一（一九三六）年までのタイの主要商品別貿易の推移をみたものである。図表二〇は、昭和二（一九二七）年から昭和十一（一九三六）年までのタイの主要商品国別輸入額の推移をみたものである。タイの輸出貿易における主要な相手国は、シンガポール、ピナン、香港が多く、次に英領印度、西印度（インド）、日本、セイロン等である。輸入は、日本、シンガポール、イギリス、蘭領印度等が主要な国である。輸出品目を

図表 18 タイの国別外国貿易

(単位 千バート)

	輸					出					輸					入				
	1927-28	1931-32	1933-34	1934-35	1935-36	1927-28	1931-32	1933-34	1934-35	1935-36	1927-28	1931-32	1933-34	1934-35	1935-36	1927-28	1931-32	1933-34	1934-35	1935-36
英領印度	2,029	1,227	5,810	15,979	11,287	19,134	6,946	6,996	5,322	4,077	100,346	34,009	35,443	44,851	48,047	23,546	9,884	12,601	13,922	15,348
シンガポール	33,232	18,213	33,250	36,404	35,679	14,626	7,229	7,645	8,459	7,741	10,119	1,756	3,518	2,067	1,466	3,067	573	749	596	582
英領馬來	1,679	1,999	1,953	1,389	3,108	27	115	57	42	61	8,623	2,007	2,660	8,834	2,467	13,845	6,391	4,042	3,994	4,064
支那	69,217	35,656	38,366	36,745	26,855	37,611	18,069	11,273	12,075	9,660	1,052	277	213	224	238	833	304	495	390	450
佛領印度支那	5,858	6,380	880	4,173	1,301	15,775	12,656	11,541	11,978	11,915	13,563	8,012	4,253	942	3,258	13,114	5,861	14,674	21,138	27,803
蘭領印度	159	17	15	12	18	700	648	769	825	1,095	4,051	(2) 11,421	1,144	1,689	1,307	27,570	12,764	10,867	11,457	12,596
日瀛	5,256	3,462	4,178	1,794	1,143	9,491	3,992	3,050	3,582	4,657	1,967	694	1,184	1,310	1,870	2,916	1,571	1,464	1,129	1,333
英國	748	206	249	344	167	2,478	708	380	250	208	2,387	40	92	429	497	2,330	1,530	204	234	263
獨逸	411	1,259	358	481	277	1,340	2,579	977	995	880	9,344	5,176	7,058	10,706	11,658	—	1	0	0	0
オーストラリア	589	427	115	344	260	5,520	3,175	2,733	2,786	3,258	1,324	429	860	1,072	1,688	70	6	9	6	7
ベトナム	1,324	429	860	1,072	1,688	201,080	99,909	92,963	101,727	108,754	276,269	134,297	144,079	172,595	158,218	201,080	99,909	92,963	101,727	108,754
西印度																				
米國																				
南阿聯邦																				
總計(其他を含む)																				

〔註〕 金銀を含む (1)臺灣及朝鮮を含む (2)銀貨 10,179,772 バートを含む

(出所：三菱経済研究所 (1937) 『太平洋に於ける国際経済関係』 三菱経済研究所、405頁)

図表 19 タイ主要商品別貿易

年度	1927-28	1931-32	1933-34	1934-35	1935-36
輸 出					
米	201,156	77,500	82,967	98,437	90,836
錫	22,424	13,433	24,542	26,347	23,375
鐵	6,959	538	2,360	4,306	13,219
木村	9,947	4,950	4,274	9,589	5,052
魚類(鹽)	3,390	2,049	1,324	2,434	1,785
皮革	1,999	752	831	944	1,674
革	2,213	188	1,008	2,807	1,237
輸 入					
綿織物 ⁽¹⁾	28,895	11,088	14,976	17,134	18,869
礦産	12,720	10,564	10,042	10,762	11,428
煙方	14,220	—	7,295	8,334	10,071
織製	8,903	7,110	4,891	5,190	5,475
草袋	8,662	3,605	2,957	6,914	5,265
糖類	7,050	4,891	4,459	4,050	4,209
類	7,506	2,455	2,400	3,147	4,158
糸	5,256	2,801	4,732	2,830	3,504
染劑	3,855	2,679	2,530	2,830	3,300
及	4,965	1,915	1,734	2,251	3,131
輛	2,507	2,822	2,299	2,559	2,819
夕	5,409	2,885	2,261	2,454	2,691
實物	(2)	504	1,059	2,518	2,549
絹織物	2,143	2,212	1,656	2,264	2,159
及	2,391	4,518	1,688	1,688	2,027
果	2,193	1,231	1,165	1,556	1,202
紙	5,756	1,627	1,474	1,862	1,107
電氣					
機械器具					
製					
品					
物					

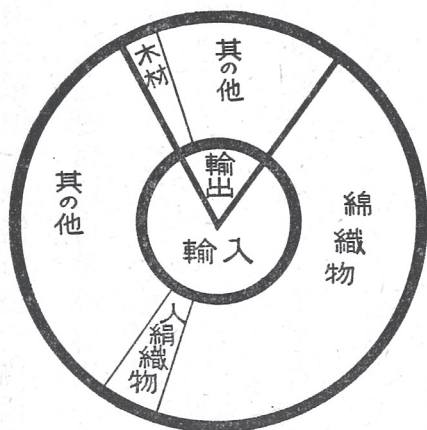
〔註〕再輸出を含まず (1) 綿製品を含む (2) 綿織物中に含まる

(出所：三菱経済研究所 (1937) 『太平洋に於ける国際経済関係』三
菱経済研究所、406頁)

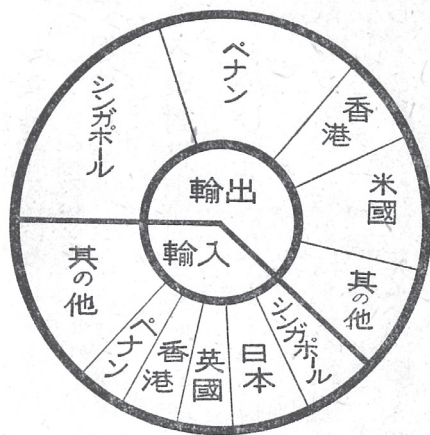
図表 20 タイの主要商品国別輸入額

年度	1933-34		1934-35		1935-36	
	千バート	%	千バート	%	千バート	%
綿織物	6,692	65.2	9,237	65.2	12,303	65.2
日本	2,509	12.9	2,642	12.9	2,433	12.9
シンガポール	2,107	9.4	2,697	9.4	1,779	9.4
香港	1,230	4.3	869	4.3	805	4.3
英國	637	2.1	573	2.1	396	2.1
ソナ	462	2.0	483	2.0	371	2.0
英領印度	14,976	100.0	17,137	100.0	18,869	100.0
總計(其他を含む)						
礦産	6,896	63.4	7,605	63.4	7,249	63.4
蘭領印度	1,673	22.5	1,340	22.5	2,574	22.5
シンガポール	1,131	10.0	1,379	10.0	1,144	10.0
ソナ	10,042	100.0	10,762	100.0	11,428	100.0
總計(其他を含む)						
鐵	2,369	44.3	2,667	44.3	3,900	44.3
日本	1,272	11.1	837	11.1	981	11.1
英國	617	7.6	609	7.6	668	7.6
シンガポール	724	4.5	0	4.5	397	4.5
ソナ	387	2.8	216	2.8	244	2.8
獨逸	6,408	100.0	7,417	100.0	8,811	100.0
總計(其他を含む)						

(出所：三菱経済研究所 (1937) 『太平洋に於ける国際経済関係』三菱経済研究所、407頁)



図表22 タイの対日貿易額品種別の図（昭和14年）



図表21 タイの主要相手国別貿易額の図（昭和14年）

（出所：台湾南方協会（1941）『南方読本』三省堂、193頁）

みると、米が最も多く、これに次いで、錫、ゴム、チーク材等で、これらの輸出額は一九三五—三十六年総輸出額の八十八・七%を占め、その中で米が六十・八%を占めている。タイの輸入品は、綿織物を第一とし、鉱油、金属製品、煙草、砂糖などが多い（二八）。

図表二一は、昭和十四年におけるタイの主要相手国貿易額の図であり、図表二二は、タイの対日貿易額品種別の図である。タイの貿易品は、米が輸出の最も多く、昭和十四年においては全体の約五割を占め、これに次ぎ重要なものは錫、ゴム、チーク材、水産等であり、輸入では綿織物が第一位、次いで食料品、金属製品、麻袋、灯油、石油等である。日本よりの輸入は、綿糸、綿布、綿織物と人絹織物の繊維品が過半を占め、このほか紙、鉄製品（ブリキ板）、陶磁器およびガラス等が主なもので、日本への主要輸出品は米で、これに次ぐものはチーク材、皮革等である。昭和十四年の日本からの輸入は約二千六百万円、日本への輸出は約五百五十万円で、合計三千百五十六万円で、約一千五十万円の輸入超過であった。

おわりに

本稿を終えるにあたって、戦前昭和期における日本の南洋・南方への商業的進出と貿易、南方・南洋の商

業の進出に関して、重要な点を考察しておこう。

第一は、日本の南洋・南方への商業的進出のさきがけが、行商であったことである。行商でも、菓の行商であったことは興味深い。日本では、富山の菓行商が有名であるが、言葉も通じず、熱く、医療の進んでいない南方アジアで、菓を行商で売るといふ発想は、非常に面白い発想であった。日本の菓の行商は、当時、中国などの地などでも日本人の菓の行商が進出していったようなので、菓の行商の国際性がうかがえる。

第二は、大正から昭和初期にかけて南洋・南方ブームという、日本人の南洋進出熱の高揚期であったことである。日本人は、当時、一攫千金を狙って、個人、富豪、企業、財閥などが、盛んに移住・殖民、海外投資、海外企業設立、海外事業などを行い南方に進出した。特に、商業の分野の進出地は、シンガポール、マレー、蘭印、フィリピンなど中心であった。また、南洋・南方に在住していた日本人の南方投資もあった。日本の南方への投資は、その他、ゴム、マニラ麻などの栽培事業への投資も多かった。その意味で、当時、南方への投資、事業進出という日本の国際経営活動が活発であった。

第三は、昭和初期にもかなりの日本人が、南洋・南洋に移住し、活発な活動を行っていたことである。大

手や中小の貿易商社、日本人相手の小売店、卸売店、旅館や娯楽といったサービス業、ゴム園、マニラ麻園、各種栽培園、水産、工業、鉱業、林業、などに従事するかなりの数の日本人が南方に滞在していたのである。特に、シンガポール、マレー蘭印、フィリピンでは、日本企業の進出につれて、日本人の移民・殖民・移住が増加したのである。

第四は、欧米の植民地政策により、日本の南方進出がかなり左右されたことである。仏領印度に日本企業の進出が極めて少なかったのは、統治国フランスの植民政策によるところが大きい。すなわち、仏領印度支那はその貿易において極端なフランス本国偏重の政策を採り、他の国に対しては閉鎖的であった。仏領印度支那は、関税制度上準本国としての取扱を受け、フランス本国との貿易においては相互的に無関税で、外国よりの輸入に対しては最高最低の複税率制度を採用しており、そのためフランス本国等の貿易はきわめて密接であったが、他の国に対しては貿易障壁を設けていた。また、外国の仏領印度支那への投資についても、かなりの制限を設けていた。そのために、日本は、仏領印度支那への企業進出や、貿易は難しい状況であった。これに対して、蘭領印度は、貿易政策において、オランダ本国と他の諸国との間で、基本的には関税率

に關して平等に取り扱い、オランダ本国に対して特惠關係を有しない政策を採った。このために、蘭領印度は、海外からの貿易や投資についても寛容であった。蘭印では、ゴム栽培などの事業の育成の為に、外国企業においても補助金を与える制度もあり、日本企業でもこの制度を受けられた企業もあった。また、マレーやシンガポールを統治したイギリス、およびフィリピンを統治したアメリカも、本国以外の国の貿易や投資に關して比較的寛容であった。ただし、日本が第二次大戦に進むような動きにつれて、イギリス、アメリカなどの諸国が、南方での日本の貿易・投資に關して厳しくなってきたことは事実である。

本稿で明らかにしてきたように、戦前昭和期において、日本は植民地でない南方・南洋の地において、活発な国際経営を行っていたのである。

注

- (一) 入江寅次(一九四二)『外南洋邦人の現勢と其の歴史的背景』南洋資料第九十八号、南洋經濟研究所、一頁。
- (二) 入江寅次(一九四二)『外南洋邦人の現勢と其の歴史的背景』南洋資料第九十八号、南洋經濟研究所、四頁。
- (三) 入江寅次(一九四二)『外南洋邦人の現勢と其の歴史的背景』南洋資料第九十八号、南洋經濟研究所、四頁。
- (四) 南方年鑑刊行会(一九四三)『南方年鑑 昭和十八年版』東邦社、三〇四頁。
- (五) ジャガタラ友の会(一九七六)『ジャガタラ閑話―蘭印時代邦人の足跡』ジャガタラ友の会、九三頁。
- (六) 南洋団体聯合会(一九四二)『大南洋年鑑』南洋団体聯合会、三三九頁。
- (七) 入江寅次(一九四二)『邦人海外發展史』井田書店、一三八―一三九頁。
- (八) 引用は南洋団体聯合会(一九四二)『大南洋年鑑』南洋団体聯合会、三三九頁による。
- (九) 南方年鑑刊行会(一九四三)『南方年鑑 昭和十八年版』東邦社、三〇四頁。

- (一〇) 南方年鑑刊行会(一九四三)『南方年鑑 昭和十八年版』東邦社、二九八頁。
- (一一) 南方の行商人、小川利八郎については、南洋経済研究所(一九四二)『日本売薬南方進出繁盛記』南洋資料第百十五、南洋経済研究所、に詳しい記述がある。
- (一二) ジャガタラ友の会(一九七六)『ジャガタラ閑話―蘭印時代邦人の足跡』ジャガタラ友の会、二五頁。
- (一三) 南方年鑑刊行会(一九四三)『南方年鑑 昭和十八年版』東邦社、三〇五頁。
- (一四) 南洋協会(一九四二)『大南洋圏』南洋協会、三四七頁。
- (一五) 南洋協会(一九四二)『大南洋圏』南洋協会、三五一一―三五二頁。
- (一六) 南洋協会(一九四二)『大南洋圏』南洋協会、三五三―三五四頁。
- (一七) 南洋協会(一九四二)『大南洋圏』南洋協会、三六一―三六二頁。
- (一八) ジャガタラ友の会(一九七六)『ジャガタラ閑話―蘭印時代邦人の足跡』ジャガタラ友の会、一七三頁。
- (一九) 清水洋(二〇〇四)『シンガポールの経済発展と日本』シモンズ、一五〇頁。
- (二〇) 清水洋(二〇〇四)『シンガポールの経済発展と日本』シモンズ一六七―一六八頁。
- (二一) 台湾南方協会(一九四二)『南方読本』三省堂、一八五頁。
- (二二) 三菱経済研究所(一九三五)『日本の産業と貿易の発展』三菱経済研究所、六二七頁。
- (二三) 三菱経済研究所(一九三七)『太平洋に於ける国際経済関係』三菱経済研究所、三一八―三二〇頁。
- (二四) 三菱経済研究所(一九三七)『太平洋に於ける国際経済関係』三菱経済研究所、三九一―三九五頁。
- (二五) 三菱経済研究所(一九三七)『太平洋に於ける国際経済関係』三菱経済研究所、四一五頁。
- (二六) 三菱経済研究所(一九三七)『太平洋に於ける国際経済関係』三菱経済研究所、四一四―四一八頁。
- (二七) 日本貿易報国聯盟(一九四二)『大東亜産業貿易年報第一輯』商工行政社、一一八―一一九頁。
- (二八) 三菱経済研究所(一九三七)『太平洋に於ける国際経済関係』三菱経済研究所、四〇三―四〇七頁。

参考文献

伊藤長夫(一九四二)『南進日本商人』伊藤書店。

- 宮下琢磨（一九二九）『邦人活躍の南洋』岡田日栄堂。
 入江寅次（一九四二）『外南洋邦人の現勢と其の歴史的背景』南洋資料第九八号、南洋経済研究所。
 入江寅次（一九四二）『邦人海外発展史』井田書店。
 入江寅次（一九四三）『明治南進史稿』井田書店。
 室伏高信（一九三六）『南進論』日本評論社。
- 南洋経済研究所（一九四二）『日本売薬南方進出繁盛記』南洋資料第一一五号、南洋経済研究所。
 メタ・スカル・ブジ・マストゥティ（二〇一一）『オランダ領東インドにおける売薬商についての一考察』一九〇〇年から一九一〇年代を中心にしての慶応大学大学院社会学研究科紀要、七二号、三五―五四頁。
- 南洋団体聯合会（一九四二）『大南洋年鑑』南洋団体聯合会。
 南洋協会（一九四二）『大南洋圈』南洋協会。
 南方年鑑刊行会（一九四三）『南方年鑑』昭和十八年版』東邦社。
 拓務省拓務局（一九三七）『外南洋事情梗概』拓務省拓務局。
 台湾南方協会（一九四二）『南方読本』三省堂。
 樋口弘（一九四二）『南洋に於ける日本の投資と貿易』味燈書屋。
- 樋口弘（一九四二）『南方に於ける資本関係』味燈書屋。
 松井清（一九六一）『近代日本貿易史』有斐閣。
 三菱経済研究所（一九三三）『東洋及南洋諸国の国際貿易と日本の地位』三菱経済研究所。
 三菱経済研究所（一九三五）『日本の産業と貿易の発展』三菱経済研究所。
 三菱経済研究所（一九三七）『太平洋に於ける国際経済関係』三菱経済研究所。
 清水洋・平川均（一九九八）『からゆきさんと経済進出』シモンズ。
 清水洋（二〇〇四）『シンガポールの経済発展と日本』シモンズ。
 ジャガタラ友の会（一九七八）『ジャガタラ閑話』蘭印時代邦人の足跡』ジャガタラ友の会。
 シンガポール日本人会（一九七八）『シンガポール日本人社会の歩み』シンガポール日本人会。
 渡邊薫（一九三五）『比律賓在留邦人発達史』南洋協会。
 坪井善四郎（一九一七）『最近の南国』博文館。
 日本貿易報国聯盟（一九四二）『大東亜産業貿易年報第一輯』商工行政社。